



句兄弟

晋子作

全



句况弟



句兄弟序

其ハ精ナリ精ハ及ナリト云モ
 よりて集ルニ句トハ歌作ナ
 古撰新してひらりともくま
 け諸一か一御を一句の
 何一もまゝにまぢし御の深
 厚の吟意を敵ナ一も一
 点の句をまゝに御の心一も一



侘乃御旦暮小あつさるべし
いしし今比高芳乃秀り遊
幸。向忠三十九人をよあひま
あつさるべしつらむり
おほまのまのまのまのまのま
乃或ふ海せく私小むす
一解をいそ物欠く註解を
加く行ふし此存御信乃將

撰その流俗千改ひ行して一
向聖千馬をる夕物なりとも
聊乃遊るをユまして多る
の難をのいぬく——花古
式のおる——のこまく小き人
か人女子多鄙の化子能て
切字のこまのまとして少ゆを
後真言のこまのま祝籠の信

あゝあゝ—げんくの夢を喻る方候
あゝあゝ—信化一知や信自見
あゝあゝ—とらあゝ—海をさるる

春の名を—侍。

元禄七甲戌稔ふる屋初五

晋其角

一番

兄

こはつくとほろむのよ—おん

か

晋子

こはつくとほろむのよ—おん

花満山の糸を上五字の千云として
芳仲山と決定—この所作者の自
然地をいふる千云を 俳諧の種は也

あつて——花のうらやとまゝあつて
ちよひはくふとくしる和句は是の
をくしのまら——を及ぼせしむの
社云吉中の一旬の布種として上字
七字よそは只ありの何^保の——しむ
梅いふふらう——本を述る
—— 答云句、其真を問はしや
景情のまゝしとくしる雜詩集に
論せることや近くしる先年
の早やかく一定の感ふこと

云——句、前をよむとの興感せしむ
芝蕉翁吉中の一旬の時山中の
美景よけあつた古きかよの信を感
せ——叙^{イテ}の早のいふことあつて
け句のうらやましくさしむことあつ
たさしむ是をくしるの句はなま
あつて何に備はるはなまかたの句
乃含いし——をむらひの景情をさし
仰し句心あましくしる沈佳期。
句を盗む癖とい等類をのこし

二番

兄

拾穂軒

地主くハ木の下の花の都

才

京中へ地元のさくや花胡蝶

老師をみるまき向く反折して市中の蝶を
清水の落ちもとスるくさくさ木のうらと
ま字のくさくさゆきうらと侍の代例

こころをぬくものをもとむる
まのうらさきの向きくさくさくさくさ
の蝶を
色、在隣家、他例多く園の中とす
京の一字を心へくさくさくさくさ

三番

兄

素堂

又是よりくさくさ一見とありあり

才

亦先ずり 木尾一見のほくーが

遊子行、残月とちや花もおぼきし人の
去のなほを懐こく心もこぼれしは
予の句もいふことなほしきも一見
とてふたは思ひもたはこみゆき金
類あはれとなりくるといふ堂々平生
口癖ふまは走を捨まゝ取らばし
云々まてらふらうとてたのなほも
しは句と味かたもはなれぬなり

云かゝると強弱の辨をわらぬものや

四番

兄

肅山

祐成、御川の石勢はしつ鳥

カ

いぢちと色共おにきし一虎作モト

御川の石勢はしつ鳥

高きとありぬれぬ細袍

此のてしれ終小 影る 勇を思ひ合
ふもや村のあふらぬをいしての志
をよめたるし 一句は感概ありよりて
其の夜の庚子申と云ふは 神代
引のてしれんとおもひよして 夜の
川に流るるのてしれ 近きとては
各句合意の 神代 兄の句小きとて
しふ字のやとて 関信進とていふの
句并 神代

五香

え

信信

雨の月や門提てけりかきんたる

弟

簾もけりあけ程も 杜若

杜若雨潤のてしれ 雨のてしれ
まのてしれも 新しとてしれ 雲中の柳花を
てしれ 関信進はしれとてしれ 俗の
向中とてしれ 一旬の外中作

うすうすは向上の向小 能てハ能
と云ふは其心明らなるもの
ありし中ハ杜若景物の一品を
て吳茶よりハ真を取のつくもの
杜若と云ふは奇なる向化のこ
なりし中ハ其心明らなるもの
作者を識りてハ其心明らなるもの
けりし中ハ其心明らなるもの
入事ハ其心明らなるもの
のちハ其心明らなるもの

と云ふは其心明らなるもの
なりし中ハ其心明らなるもの
わらわらと云ふは其心明らなるもの
ハ其心明らなるもの

六番

松棘の患を云はす

兄

曲水

三弦やよゆ山嵐は雨
カ

と云ふは其心明らなるもの
ハ其心明らなるもの

よきより毛吹時代の老翁の南無
所命ありてはなほ小年をいふん
向よりは眞のまゝとてしるべし

八番

兄

雲谷

陰情は沙走の菊の齡ふ

才

秋一あし師走の菊しあふ由田

中七字瑞筆はつー果れ春の情

まゝの御さくらとて霜雪の調ひ小
後を對をいそへつゝ存せまの
秋後の菊はよそよなりらん雲谷
向よりしるし立り老翁の情も
して定陰と情を待とりしるん
九番

兄

岩谷

遠慮なきおのゝ情の秋は師

才

まを庵と名や自利小はるる水鏡

論俳句如論禪日之類と水鏡

差ふる——空房獨了の似て

十番

似ぬ類二句一物な

足

干血や汐のひるの掬少舟

舟

ほ——血やうらみけてはる簗少舟

此舟ハ古来棹頭の考也——

と云ふも云を以て舟の類非

のこれと云ふは舟の干涸の舟

と云ふは舟の干涸の舟

つらけて干涸の舟あり

いそと云ふを舟の形客

以と云ふは舟の形客

みる人も舟を以て

猶古舟古舟を以て

十一番

見

杉風

為形舟上卯と桜看よきり

才

屋形舟はたぬ女中出まろく

暮春の至情とあるぬは桜をりを
色よめてと伝はまろくして風えいそ
死よろつり女人のあはれなり
浅州上舟と向對して溜北春天樹

江東日暮雲と日向をかきとむえ
ぬ女中らりるん後控橋しほほ
おしひやとえげまろくしてま
春をたぬとあるぬは山吹道遠の人
十二才

具趣句外ある也

見

杜因

馬ハゆれ牛ハ夕日の北へ
才

葉ハゆれ牛ハ夕日の北へ

人
志ある

兄

古枕

この村乃あたらしく降るまき鳴るが

カ

あたらしく降るまき鳴るが

窮民をあたらしく田家の種討つては
下愚いふつては心を痛めてひまを
あつこのまき鳴るまき鳴るが

とふもあつと悲れし人 惻^{アハレ}農^ノの
至誠あるまき鳴るまき鳴るの
るも歎まはせ性を一ツまき鳴る
とと憐れまき鳴る列子と心をも
まき鳴るまき鳴るまき鳴る
十五番
あつ

兄

許六

人
人々不 政師の給や衣文

中

は 輝し なるめし なるや なる人

二 可し なるめし なる人 (かき なるめし なる人)
よき なるめし 自守 節小 神なる なる人
や 節弁 せし なるめし なる人 (なるめし なる人)
衣人 とい なるめし なる人 (なるめし なる人)
よめ なるめし なる人 (なるめし なる人)
なるめし なる人 (なるめし なる人)

十六 中

兄

去末

浅 芽 年 や 満 くる なる なる なる なる

中

満 くる なる なる なる なる なる なる

明 なる なる なる なる なる なる なる なる
あき なる なる なる なる なる なる なる なる
正 なる なる なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる なる なる
なる なる なる なる なる なる なる なる

遠道わたりて色折れ少れぬ
ふらりも各句各もるべし

十七のあ

兄

妹

海棠のてあ、満きり夜は月

才

海棠の花のうらやおぼろ月

眩しうと云ふ字は満しと云ふ字より
ハしては月のなるまあるき春真
なり花を一句のこころに
自向よとて優艶は句の力を
趣向し方しつる花もみちる
る所をうらや花とて
時ハ花や煙花や雪とまのひる
花を分別し一花をいつる
物ハ吟心をいませの
精きのこと

十六番

兄

立圃

おひらりつゝもよほる。音平りな

キ

おひらり秋^{（筆）}御乳のいせ

至愛の心こゝろ作者の功をあし
つゝもよほる御乳のいせ
又ふまはれは都鄙のいせ

句にこそよほる。さしは南村さけの
おひらりと秋^{（筆）}御乳のいせ古版
の書は押もれ侍を予歎ありて
古人の御乳を再訪せりお乳の人の
おひらりはあつ物いせぬきちんはは
はらへる。音平りといふはわらへて秋句の
雅を述べぬ。いせをよほる
もらてきりしよと音平りといふは
久んあつ。音平りといふはわらへて
男ひやりせは成長といふはお乳の

こしてるもの花をちん細腰こしを大
長刀よりけてもよめやうれいそホハ
社神の一寸もいそこれ書もあつて
ろいと答へを身へけとふ向ふ
對しては片の傍よりあし

廿一番

兄

彫棠

つるまや牛といへて相撲を

弟

よりのかゝるも傳説をききよむ

向の書人なるも向すまの
一と書し一牛といふ字もいへて

廿二番

上も立あふんや

兄

宗周

人けまけや六月やしきん

弟

桑子鳴や六月やしきん

杜浦は一字血脈の格ありむと云
ある字より句とてさるる字は中
をあらわすなりと云はるるその格あり
して一句血脈の格をさして人伝
ふといふ情感の老衰も古あり
指あてしるや あらむはたさる
おろされて句を格のあらむは
初めより一ふゆふありとて
老とありぬるをさるる 老松の
深恩をさるるぬき 新古の

差あるく一句は能得の血脈神
かゝるや
あらむもあらむとて一句の句神を
めくあらむとて句神あり
あらむもあらむとて句神あり
血脈流連すしるや

廿三句

兄

東順

あらむもあらむとて句神あり

云々入るそれを宇居のあつても
宣くして當自に又免の鼻をかたき
こひてさうらうさうさうさうさ
よも成るさうさうさうさうさ
かあさうさうさうさうさうさ
とて田舎のさうさうさうさうさ
ハ俗者よしく沈みさうさうさ

廿五番

兄

僧路通

大佛うーろよ花の盛るさ

才

大仏膝うーろよ花の盛るさ

東叡山の松林や池をたふして
教景祠をききけをほろひさうさ
花のさのあけさうさうさうさ
うーろ花を替わさうさうさ
うーろ材の外さうさうさうさ

志あり一自を求。人の感をかよふ

廿七番

兄

越人

ちる所の 2. あかしの 題きよの とも

井

ちる所に 2. あかしの 題きよの とも

尋常の 例ふとして 申さざる 以俗
をきく。二 荷今 越人 ホ。 好む所の

の 癖や 是に 別傍と ぶ。 おおむら
一向の 2. あかしの 題きよの とも
2. あかしの 題きよの とも
自然あかしの 2. あかしの 題きよの とも
あかしの 2. あかしの 題きよの とも
あかしの 2. あかしの 題きよの とも
あかしの 2. あかしの 題きよの とも
あかしの 2. あかしの 題きよの とも

廿八番

兄

玄札

高時の句照かゝあまき

廿九番

兄

秋色

舟梁乃流のうねのま

舟

永くを枕の流や園乃外

牛島といふかしの松入あつさ

かみ髪回し口な流のま
舟の三由のま
あま水の向のま
こねのま
しん船のま
よつちのま
をまのま
園の外とま
あまのま
あまのま

一舟の船はく

三十一番

見

春院

筆の舟はく舟はく舟はく

舟

舟の舟はく舟はく舟はく

舟の舟はく舟はく舟はく

舟の舟はく舟はく舟はく
舟の舟はく舟はく舟はく
舟の舟はく舟はく舟はく
舟の舟はく舟はく舟はく
舟の舟はく舟はく舟はく
舟の舟はく舟はく舟はく
舟の舟はく舟はく舟はく
舟の舟はく舟はく舟はく
舟の舟はく舟はく舟はく
舟の舟はく舟はく舟はく

三十一番

見

春院

舟の舟はく舟はく舟はく

こゝろをまて面白くまのひゆる
あまつむち方人のくるまこも
ひしあふくらのまかまふん
君くお龍のほろぶげふふはく
そい列くいとまありふ部のまか
三十二かま
そハち根なるま

又

尺牘

源平の山向ふかる一かこも
井

は乃ばふーろま何を法教を

都雅波のま秘をたひては平内名も
吟ひける日記より尺牘一侍ま無伴
獨相求伐木下この幽景をえあて
はくまふすまの島のま其新ま探ふ
り似たり浦ままをふくくる其物
あしすーハひんまふのま
心をつけま後句の剛意まま(ま)
心所不冬有餘趣とすま(ま)

にさかると及ぶるは情を絶
浦よりするも色とけりんりるは
何ととらへんか年々を同
け守乃境自然を志す

二十四番

兄

西鶴

鯛はもハ又の里もあこしの丸

舟

鯛は花ハ江合牛心子の丸

花あきあふ心よりて二千圓の外
心小かみの一句のそんれ影る申上字
力をかりて啓榮朝の樂ふあふ
まは難は江小生きて住するの丸
あき月とめてあひの影のあふたか
約せて字景嘆時のおもひ感ふ懐き
末二十年は世の力と入るる鶴
と云ふ人おもふてハ教あつ

三十五番

今ハ故人のつ小成ぬ

兄

字白

却も事は一巻能くうひりり

介

多しなりて有る鳥や 昌 魂

経書に記すまこと思ふとあしく上戸の
ゆゑ志のあこころ書はたかやうにけ形
ハ郭公のよそとあはれなも 題一名の
常物なれハ縦横をわちり侍るよ

能得る事一入りのゆゑ一は
乃物よ少しとてゆゑにゆゑに
小入りの事なれ

郭公啼く飛うしきハ一 蕉

いふるやあわぶあふも何れも前

け種ハ能得るやあひり入る事
是ホの格法をゆきせハ縦横展
難しとても向はる事あくし
縦ハ烈何れも月雪柳梅の折小
少きて活奇連能くもあはれ日の本

題(横) 吾本(か)入(ま)あ(す)
う(わ)あ(て)火(た)焼(し)餅(し)手(て)燗(あ)拂(ふ) 鬼
う(し)豆(ま)の(た)く(あ)る(他)倍(ばい)数(すう)を(こ)して
い(ら)あ(ま)え(張)の(影)ま(あ)は(れ)古(こ)方(か)の
本(もと)を(と)り(ま)し(て)今(いま)の(式)例(れい)を(ま)り(て)
又(また)孝(たか)の(力)を(と)り(私)の(詞)を(く)一(いつ)の
何(なに)と(ま)さ(は)ら(は)く(一)枝(えだ)の(影)ま(あ)は
る(と)り(ま)し(て)今(いま)の(式)例(れい)を(ま)り(て)
又(また)孝(たか)の(力)を(と)り(私)の(詞)を(く)一(いつ)の
何(なに)と(ま)さ(は)ら(は)く(一)枝(えだ)の(影)ま(あ)は
る(と)り(ま)し(て)今(いま)の(式)例(れい)を(ま)り(て)

讀(よ)む(せ)ー(ま)い(あ)て(は)あ(ま)の(事)
あ(ま)の(事)を(く)あ(ま)の(事)を(く)あ(ま)の(事)
あ(ま)の(事)を(く)あ(ま)の(事)を(く)あ(ま)の(事)
あ(ま)の(事)を(く)あ(ま)の(事)を(く)あ(ま)の(事)
あ(ま)の(事)を(く)あ(ま)の(事)を(く)あ(ま)の(事)
あ(ま)の(事)を(く)あ(ま)の(事)を(く)あ(ま)の(事)

三十一

見

一

風(かぜ)ま(り)る(と)あ(ま)の(事)を(く)あ(ま)の(事)
か

井の柳 木の葉を

凡一葉の枝をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を

木の葉をよみて木の葉を

とよみて木の葉をよみて木の葉を
木の葉をよみて木の葉を

井の柳 木の葉を

とよみて木の葉をよみて木の葉を
木の葉をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を
よみて木の葉をよみて木の葉を

とよみて木の葉を

見

僧吟市

丸令羽をりぬ雪やあここの山

中

青漆をきりの裾をかか令暇

夏代小丸令暇きりかか令暇
とこ形よよと申すよよと申す
及こよよと申すよよと申す
清浄の格とこよよと申す

二十八番

兄

轍士

風をれけりあの下り石を

中

冷酒やこころも死るさみ

一向の涼味をいぬる人皆苦炎熱
我愛夏目長薰風自南來殿閣
生微涼東坡と百世の師として云
るや亦亦あき地小るよひ羊時心

絶々とききぬ思ひのつらさ
合てしよふ起かす
さるるもいふにせし入集ぬ
魔と辨て幸吟を
不^{モタヒ}乃ひ思ふも根ある
小室をえられぬ
詩を歌して編昔を
海のみをこよも

三十九

見

晋子

霧の空 橋の歯 一 冬の日

才

芭蕉

塩鯛の歯 莖もきく 魚の店

是れ冬の日
山月落と傳ふ
峽の橋よきて
なるは 泣衣を
詩の余情

とよぶらん此句感りのうらみ
網の歯のちかぢきんとし
おのふせしらん妻零の形も
なりて老の果年のうらみ
ちかぢきんをさしおのちかぢ
しんは信後あをさしおの
ちかぢしんは信後あをさし
合せしんは信後あをさし
侍。入海士の歯の白き

歯のちかぢきんとし
よりの後白く成る
侍。師匠のちかぢきんとし
自解をのちかぢきんとし
後白く成る
侍。師匠のちかぢきんとし
自解をのちかぢきんとし
後白く成る
侍。師匠のちかぢきんとし
自解をのちかぢきんとし
後白く成る

味を好まぬ言はれ難し
味を好まぬ言はれ難し
味を好まぬ言はれ難し
味を好まぬ言はれ難し
味を好まぬ言はれ難し
味を好まぬ言はれ難し
味を好まぬ言はれ難し
味を好まぬ言はれ難し
味を好まぬ言はれ難し
味を好まぬ言はれ難し



